

## 衣装における民族性の違い

麻生 幸子

(手塚 恵子ゼミ)

世界中のほとんどの人が身につけている衣装。生活していく上で欠くことのできない存在だが、普段既製服を身につけている私たち日本人にとって民族衣装というと、どこか荘厳で仰々しいイメージである。

既製服を着用する日本人とは対照的に、民族衣装を常用している人たちもいる。民族衣装はその国の歴史、国民性、宗教、風土、文明の発達の進捗などによって独自の雰囲気や醸し出す。文様や織り方の技法、民族衣装に添えられ呪術的意味をもたらす装飾品など、目で見てとても美しい。それに加え、宗教的神秘なども感じることで民族衣装は実に奥深い。

以前は目で見て「すごい！綺麗だ！」と視覚的に捉えて感動していただけだったが、その国々、性別によって民族衣装に対する概念や思い入れは違うことに気がついた。例えば、日本の成人式では大多数の女性が振袖、大多数の男性はスーツというように、女性の方が民族衣装に興味を示しているようにみえる。また、日本の学校や会社などで制服を着て仲間意識を共有するように、既製服でも民族衣装と同じような精神を持つものもある。民族衣装を常用するインドでは、民族運動が盛んになった時も指導者ガンジーがサリーを民族再生の象徴にした。(国立民族学博物館 2005) このように、民族衣装は民族のアイデンティティを誇張するといっても過言ではないものである。晴れ着においても日常着においても、民族的な特徴は男性の衣装よりも、女性の衣装により強く表れる。私はこの論文で、民族性が顕著に表れる女性の民族衣装を題材にして、国や民族衣装の関係について考察することにした。

### 第一章 「衣」の遷移

#### 1. 衣の起源 衣の起源は、しばしば、氷河

期をむかえた人間が毛皮をまとったところにあるといわれている。この頃現出したいわゆる旧人と呼ばれているネアンデルタール人が、人類としてはじめて衣服を発明したといわれている。なぜネアンデルタール人が毛皮の衣服を着始めたのか、それは進化の途中で発汗機能が発達して、人類が次第に体毛を失いはじめたからではないかというのが通説である。(深作光貞 1983) ネアンデルタール人は、マンモスや鹿や猪など身の回りの獣を狩猟し、獣の肉を石ナイフで削ぎ落とし、天日に干して毛皮としてはおっていた。(深作 1983)

しかし、おもしろい事例がある。人間は、寒冷地でも服などなしで生きられる可能性があることを実証する民族がかつていたというのである。南米大陸の南端、南極にほど近いフエゴ島とその近辺の島々は、木々も曲がって生えるほどの強烈な寒風が吹きすさぶ荒涼とした土地だが、そんな土地にもヤーガンといういくつかの民族集団が海産物に頼って暮らしていた。ピーグル号でダーヴィンがこの地を訪れた頃の人々の姿は、毛皮をまとってあればまだよい方で、アザラシの油を皮膚に塗っただけで凍てつく海に潜って貝などを採る女性もいた。後代になって、ひとたび毛皮を経験した途端、肺炎患者が続出したという。(21世紀研究会 2000)

やがて、気候も温暖になり新人と呼ばれる人が登場すると、衣生活も発達して毛皮衣料の調達も製作も躍進していった。人々は狩猟から定住農耕を行うようになるが、その移行と共に衣服も目にも鮮やかになっていったとされる。(小川安朗 1979) 安定した食料が得られるようになって、衣服を垣間見る余裕ができたからか。現在でいうおしゃれに対する欲求が出てきたからだと考える。

また、人類は地球上の強大で勇猛な動物と比較してあまりにも非力であるので、他の強大な動物

になりたいという願いも込めて、鷲やワニなどを神として崇拜する「トーテミズム」につながった。このトーテミズムは信仰を主とするものであるが、ある種のおしゃれということもできる。ライオンに憧れた部族はたてがみのかぶり物をかぶり、パプア・ニューギニアでは極楽鳥の鮮やかな羽で頭を飾り、あたかも極楽鳥になりきった。(深作光貞 1983)

衣の起源は、一般的には自然環境や人間の身体の進化为原因で、衣服の形態を左右する意味でも、自然環境や人間の身体の進化为衣を作り出したと考えることができる。

II. 近代の「衣」 この頃から、西欧を中心に「ファッション」という概念が生まれた。ファッションは消費社会と工業化の発展とが密接に結びついた西欧独特の現象といわれてきた。消費社会と工業化の発展に伴い、大量生産の衣服 (= 洋服) が流通し始める。

消費社会の特徴として、他人の持たない貴重で珍しいものを所有したいという欲望も無視することはできない。このような欲望から上流階級のトップ、君主制下の支配者は、地位、富、権力を誇示するためにもいち早く洋服を手にしたとされている。下層階級の人が上層階級の持ち物やスタイルを欲しがるといった時代もあったが、上流階級の着ている新鮮な洋服に、庶民は羨望というよりは嫉妬(社会階級の間に広がる格差に対する反感)を感じていた。このような嫉妬はやがて軽蔑というような感情に置き換えられる。

したがって、洋服は普及していくのだが、違う階級の着ている洋服はどこか外国かぶれで違和感を覚えたりしていた。つまり、同じ階級内で趣味嗜好が統一化されていたといえるだろう。(Mukerji, Chandra 1983)

やがて多様なスタイルが出現し、競争のためのファッションが発達することは、社会の変化とともにますます顕著になっていく。もっとも明らかな変化は、嗜好性が多様化したことである。個人によって趣味嗜好も異なってきたのだ。

その一方で、伝統的な民族衣装は19世紀に入ってから国民国家の形成、あるいは民族主義の高揚、戦争により形が整えられ、規格化されたものも少

なくない。(21世紀研究会 2000)

III. 現代の「衣」 戦争により民族の文化、領土の拡大を図り、他国を植民地化することによって、衣装は多大な影響を受けた。征服国は属国に自国の文化を強制し、否応なく民族衣装は剥奪されたり、自国の文化を反映させられたり、逆に、征服国が属国の自然条件に合うように衣装を作ることもあった。第二次世界大戦など戦争が激化した状況下では、衣装を選べる余地はなくなり、日本では「国民服(男性は軍服、女性はもんぺ)」というスタイルしかできない時代もあった。

しかし、第二次世界大戦後には文化的にも開放された日本などは意欲的な改新を遂げ、民族衣装である着物はタンスにしまっておいて、洋服を着ることが主流となってくる。現在はほとんどの地域で普段は洋服で、冠婚葬祭や祭りなどの行事の時にだけ伝統的な装いをするのが主流となっている。日本はもちろん、アジア各国や東欧諸国などにこのような国が多い。

また、航空機なども発達し容易に外国に行けるようになったこともあり、交流も盛んになって、民族衣装もお互いの利点などを取り入れ変化した。

『ファッションの文化社会学』の中でジョアン・フィンケルシュタインは、「ファッションの役割は、思想や行動、そして衣服という物質を通して、個性的になり群衆の中で目立つことなのだ。ファッションによって現状が維持され、社会秩序への服従と画一化が押し付けられることもある。」(ジョアン・フィンケルシュタイン 1998 p.19)と述べている。個性を表現するのに最適な方法であると同時に、制服のように個性が閉じ込められ、同一の社会的立場のしるしとしての機能も果たす。

機械化が進み、個性や美の追求が盛んになったが、衣装全体を通して言えることは、衣装とは我々人間と同じだということである。具体的にいうと、まず生まれ、周りに認知され、必要とされ育つ。そして周りの影響を受けながら変貌したりしながらやがて消えていく(または生き返るのである)。

## 第二章 羞恥心の民族的差異

世界には個々が違うファッションを楽しむ洋服を着ている人々や、宗教のために好きな衣服を着ることのできない民族、常に裸に近い格好をしている民族など、様々な民族が生活している。その中でも、私が考える露出の度合いの対照的な民族の羞恥に対する心理を比較してみたいと思う。

まず、一条まとわぬ姿、または下半身のみ隠しているいわゆる裸族と呼ばれる民族と、身体のほとんどの面積が隠されているイスラム教徒とを比較してみたい。

1. 裸族とイスラム教徒 ここていう裸族とは、体を隠蔽する習慣を持たない部族であって(下半身のみを隠すものも含む)、成人も未成年も男も女も裸体、もしくは裸体に近い姿をしている人々をいう。

テレビの旅番組や外国生活体験番組で裸族の姿を目にすることがある。まず違和感を覚えるのが、カメラの前でも彼らは恥ずかしげもなく日常生活を行うことだ。思春期にさしかかると異性を意識するのが当たり前だが、裸族の人々は異性の前でも何ら変わりなく全裸に近い格好でも異性と接する。一般的に裸族は文化水準が低く稚拙で、羞恥心という感情は我々と比べて格段に低いといわれている。それが私たちの周知の事実となっているが、この一般論を覆すような事例も数々報告されている。

スピク川北部のペイルングア山脈に裸で生活しているクウォマ族は、婦人や少女の下半身を見ているところを取り押さえられると、いくら小さい男の子でも罰せられる。叱り飛ばされるか、ひどい時は殴ったりされた。そうやって小さい頃からその場所は見てはならないと覚えこまされた。万一思春期の若者が少女のことを必要以上に眺めたとする、それは彼女に言い寄っているとみなされ、彼女の親族によって報復行動が行われるほどシビアなものである。そのため男性は疑われないような行動をすべく、女性とはなるべく背中を向けて話すなどの努力を怠らない。

また、フエゴ島では成人や分別のついた子どもは革製の三角形の腰布をつけることが常識となっ

ていた。しかし、ジェームス・クックによれば、彼の水夫連中がこの常識を破ると、フエゴ島の原住民は赤面して明らかに困惑した表情を浮かべたという。(H.Ellis, 1900, S.18; J.Guttzeit, 1910, S.30.) アンダマン諸島に住むオンジ族の女性が、恥ずかしげに目を伏せようとしているのに、無理矢理カメラの方を向かされている写真や、慌てて下半身を隠している写真なども残されている。

このような事例の背景には、裸族は裸体でかつ稚拙だから、何をしても大丈夫であろうという研究者やカメラマンの蔑視が存在するのであろう。きちんと羞恥心の存在する裸族は、自尊心を傷つけられていることもある。

裸族は公の場の異性間での接触をタブーとし、必要以上の大げさな身振りは性交渉を促すものだとされ、言葉、視線もすこぶる慎重でないといけないとされる社会である。それに加え、上記でも述べたように度々外国人などの好奇の目にさらされ、羞恥を感じる機会があるのに、なぜ彼らは衣服を着ようとししないのだろうか。

基本的に熱帯地方中心に住んでいることもあるので、自然環境の観点からいうと暑さを凌ぐのには適当な格好であろう。しかし、それ以上に彼らが意識していることは「神」であると考えられる。裸族は、裸装といって裸の状態に直接皮膚に加工を施し、時には体型を変えて装身的な効果を表す場合がある。その目的というのは、原始信仰的な関心をもってする場合が多く、各種の祭りの儀式、信仰する神への奉仕のため、あるいは個人の護符(お守り)、呪術、はたまた種族の象徴、対敵威嚇にいたるまで様々な目的がある。これらは単純幼稚で個性はないが、神秘的で厳格で、根強い信仰による観念で行われていることが特徴である。裸装は、単なる趣味や好みによる現代の装飾心理とは異なって、しきたりによっているために任意に変えることのできない宗教的な習俗として行われることが多い。(小川安朗 1979)

裸装は肉体的な苦痛や生活上の不便を伴う場合もあるが、これを耐え忍び、これを甘受することによって大きい福利をうけることができるという信仰的な観念のもとに実行している。(小川安朗

1979) 直接身体に加工するものは一生涯これを抹消することのできない装身効果を表すので、神

への信仰心を表す裸装をも打ち消すような衣服は、裸族にとって神を蔑んでみるための道具にすぎないのではないか。やはり神への信仰のための裸装を第一に考えた場合、それを邪魔する衣服を着用し始めると、神への信仰心が薄らいでくのではないか。そのため、裸族は伝統としきたりを守り、21世紀の現在でも、旧来の形態を貫いているのだと考える。

次に、イスラム教徒の衣装について考えてみよう。イスラム教徒の女性という目以外の部分を黒い布で覆って、全身黒装束で慎まじやかなイメージがある。いわゆるチャドルと呼ばれるものである。しかし、同じイスラム圏でもその布の面積や構造、色使いなどは違ってくる。現代のチャドル以前は、黒というのは死や葬式を連想させるため避けられ、白か模様地のものが好まれた。しかし、現在のイランはホメイニ師の教えに従い、黒を正式な色として採用している。また、薄い色や違った色を好む女性もいる。一般にイスラム圏では年代によって流行の色などが異なってくるのだが、田舎の高齢の女性は現代風の流行を嫌う傾向がある。これに対し、若い女性の中には様々な色つきのチャドルに夢中になる者もいる。

なぜイスラム教徒はそのような格好をするかという、もちろんイスラム教の聖典である『コーラン』が根底にある。イスラム教では、家庭の外では好奇の視線から身を守るため、大事な部分を包み隠すべきとする習慣がある。家族以外の者に肌を露出することが禁じられている。よって、目以外の全部分ほどの広範囲を布で覆っている。これらは『コーラン』に示されている。しかし、このような服装の規定を厳格に守ると、何かと支障が出てくるものである。例えば、スポーツはチャドルを着用していたら非常に厳しいものがある。本来スポーツをする時にはそのスポーツに適した格好をするため、ほとんどが肌を露出する面積の多いものを着用する。このため、教義によって肌の露出の難しいイスラム諸国ではスポーツの振興が遅れている。(Pilipina Legal Resources Center, Inc 2001) イスラム教では男尊女卑的な考え方が現在も根付いているので、いくらスポーツがしたくても、かわいいミニスカートの着たくても、『コーラン』の教えには勝てず、現在も神の

教えに基づいてチャドルを着用している。

身体の露出面で対照的な裸族とイスラム教徒は外見上全く違うが、神を畏れ神を大切にしているという共通点がある。神を崇拝するが故に、科学の進歩が著しい現在も昔の生活様式を変えずに、神を中心とする生活を送っているのではないか。裸族やイスラム教徒はわれわれ日本人が想像するよりはるかに身近に宗教や神が存在し、生活に密着しているといえるだろう。

II. 日本人とヨーロッパ世界 次に我々日本人について考えてみることにしよう。現在でこそ欧米などからのファッションの流入により、露出度の高い服も若年層を中心に着られるようになってきたが、日本では昔から露出度の低い服を着て、無駄な露出をしないことが美徳とされてきた。そのようなこともあり、街行く若者の露出の高い服装を見て、顔をしかめる人も少なくない。対照的に、ヨーロッパなどでは薄い布で露出度の高い服を着たり、数々のリゾート地が存在することから、開放感溢れた服を着る。そのような光景をテレビ等で一度は見たことがあると思うが、日本人にとっては恥ずかしささえおぼえる格好である。現在でこそ、ヨーロッパに近いファッションを身近に見ることができるが、日本の伝統的な服装に対する感覚からいくと、理解しがたい服装の文化である。

この理解しがたい服装や羞恥に対する概念の違いは、すでに中世の頃には顕著であった。古代より、日本では中国からの文化流入が盛んに行われ、生活全般において仏教による影響が大きかった。仏教では肉体や快楽をむなしいものと考えており、古くから裸体を描いた絵画はあまりつくられなかった。仏教美術においては、仏像を彫ったり描いたりするために人体描写を種々試みたにしても、その究極の目的が精神表現にあるという狙いからは決して離れることが許されないとされている。人間の裸や露出の高い描写を好まなかった日本では、服装でもそのような傾向を嫌った。女性の肉体を包む柔らかで美しい着物やその着こなし、それらをとおして生まれる情緒にこそ、女性の美しさや色気が漂うものであるとされた。(元田與市 2006) 身体を覆っている着物からちらっ

と覗くうなじや鎖骨、足首などに日本人はエロティシズムというものを感じたのだろう。日本人が、現在でいう「チラリズム」に性的魅力をかきたてられるのは、見せないことこそを美德とした考え方に由来する。身体のラインを強調することも嫌った日本では、ゆったりした着物を着た。男性をかき立てるのは、あながち露出の激しい格好とは限らない。B・ルドフスキーは著書『キモノ・マインド』の中で、「着物とは、セックス・アピールのあふれた豪華な眺めであり、これに比べるとわれわれの水着コンテストは幼稚園のお遊びに過ぎない」と述べたほどである。

また、身体の露出に否定的であった日本では、現在とはちがいが胸＝女性を象徴するものという概念もなく、どちらかという赤ちゃんの成長のための道具として捉えられており、(元田與市 2006) 性的なものという意識化がはかられなかった。一方ヨーロッパでは、豊かな胸が強調され、建物の屋根の無いはりだし部分をさす「バルコニー」という語が女性の豊満な胸をも意味した。豊満な胸が建物にまで影響を及ぼし、胸への性的な眼差しが顕著であったといえるだろう。

日本では、古代宗教においての中心は女性だったが、仏教・儒教を積極的に取り入れた支配階級では力を及ぼしていた女性が排除されていき、次第に女性は男性に従属するようになった。(駒尺喜美 1985) 女性は、自分の我を張ったり、気ままな言動は許されず、夫の前に立つことは許されなかった。明治時代になっても、男性の洋服化は公的な社会生活面においても急速に進んでいったが、女性はなかなかその方向に進まなかった。着物に比べると機能的で活動的で、体のラインをより顕著に現す洋服は、「女らしさ」に反するものとして社会の大きな抵抗を受けたし、そのような抵抗を懼れて女性も敬遠したのである。



図1 (『下着の誕生』 戸矢理衣奈 2000 p.38)

日本では、仏教の概念と女性が自分の美しさを誇示することは許されないという概念が絡まって、露出の低い慎ましやかな着物が主流となったのだろう。一方ヨーロッパでは、女性のヌードなくしては芸術を語るができないと言ってもいいほど、芸術性の高いものである。多くの神々を崇めた多神教の古代ギリシャでは、理想的な肉体をもつ人間がそのまま神と考えられたという。以来、伝統的に人体美をたたえ愛したヨーロッパでは、神話を題材とした神や聖なる存在としての男女の裸体像がつけられ、描かれてきた。(朝日新聞社 1992) ヨーロッパでは1880年代半ばにギリシャの神をモデルとした広告が頻繁に登場するようになったことにも、神が理想的な肉体美として称えられていることがうかがえる。日本のような厳しい男尊女卑は存在せず(あったとしても早い段階で解放運動など行われた)、女性の裸は前述したように神聖であるとみなされていたこともあり、賞賛されていた。日本では赤ちゃんを育てる道具として認知されていた女性の胸は、ヨーロッパでは女性の性を象徴するものとして、イメージされていた。女性のヌードの絵画は芸術的で、官能的で、そして聖なるものであったのだろう。

III. 部分ごとの比較 i) コルセットと帯 II. では、日本とヨーロッパの衣装について理念の面で比較してきたが、本節では実際の衣装に即して論じてゆきたい。ヨーロッパの女性の衣装は立体的であり、日本の着物は平面的である。その点を衣装そのものから、まずはウエスト付近から考えてみたい。ウエストをきつく締めつけてくびれを強調したコルセットもヨーロッパならではのものである。



図2 (『下着の誕生』 戸矢理衣奈 2000 p.53)

コルセットとは、12世紀中頃に女性が美意識を追及した時に、ウエストのくびれも求められるようになり誕生したものである。コルセットには鉄を縫いこんだものまであり、着た後の強固な状態から「鉄の乙女 (iron maiden)」と呼ばれていた。(戸矢理衣奈 2000) コルセットの上には長いスカートを何枚も着て、更にくびれを強調できるように着こなしていた。苦痛を我慢してまでコルセットをして女性らしいラインを強調するなど、美の追求は凄まじいものであったといえる。また、有閑階級に言及したことで知られる経済学者のヴェブレンは、著書『有閑階級の理論』において、コルセットなど著しく家事をするのに困難な格好をしている女性を持つほどその家は裕福で、富を象徴していると述べている。(ヴェブレン p.164) つまり、コルセットを巻いた女性は家事をするまでもなく、(家事手伝い者が他にいる) 優雅な暮らしをしているということで、羨望の対象へとなくなっていった。しかし、まもなく女性たちの健康上に深刻な悪影響が見られるようになり、1880年代には国民的な問題として政府が関与するまでの問題となり、コルセットの着用は下火となってくる。

一方、日本でも着物を着る際はウエストに帯を巻く。帯は装飾性を重んじられて次第に華やかで大きなものになっていくが、初期は素朴な平たい布であった。江戸中期から段々と幅が広くなったり、帯が発達していき、補助具としての帯留も用いられるようになった。(青木英夫 1987) 帯を身につけてみるとコルセットとは違い、多少なりとも苦しいことはあっても苦痛を伴うことはそうない。しかし、日本交通社が1954年に出した英文では、胸元や腹部を締め付けられ、ちょこちょこ歩く姿は苦役そのものと思われていたようだ。前述したように、日本では女性の肉体を包む柔らかで美しい着物を通して女らしさが成立する。動作に束縛される着物を着て、その束縛の範囲内での立ち振る舞いが女性の極致とされていた。(駒尺喜美 1985) しかし、ヨーロッパとは異なり、束縛されつつも家事や身の周りのことを一生懸命行い熱心に働くことが女性に求められたのだ。

なぜウエストにコルセットや帯を巻くようになったかには二通りの解釈がある。ひとつは、肋

骨があるので上にずり上がらないし、腰骨があるので下にずり落ちないので、巻きつける場所として最適であるからという説である。もうひとつは、人間の大切な内臓や器官を数多く内包している胴体を、呪術的に守護しようとする信仰がその元にあるのでウエストに巻くという説である。南米やオセアニアの裸族はウエストに紐衣を巻くが、実用的には使っていない。実用的に使用したい時は、もう一本上から重ねて紐を巻く。(深作光貞 1983) つまり、呪具として神聖なウエストを守ろうとしていたのである。このような事例は古代エジプトの最高傑作「ホル王のカーの像」からも見てとることができ、古代文明社会から紐衣が呪術の道具として存在していたことが分かる。

紐衣は、転じてコルセット、帯のように形を変えたものになるが、紐で締め付けることによって生霊たちを体内に封じ込めておくことが、健康上きわめて大事であるという概念から生まれたものである。(深作光貞 1983) ヨーロッパと日本は見かけの形態は違っても、同じウエスト部分に巻物をしている。両者ともその起源をさかのぼれば、呪術的な概念からウエストを締め付けているとみなしてよいであろう。

ii) 下着 次にスカートや着物の裾の下に着用する下着について考えてみる。日本で下着(当時はズロース)が普及しなかった理由として、「感覚的にも局部に密着するズロースはまるで男性に触れられるのと似た羞恥を引き起こしてなじめなかった。」(武田尚子 1997 p.164) とある。ヨーロッパ社会にも少なからずそのような感覚はあったと考える。では、日本人はなぜ下着を履き始めたのだろうか。1932年に起きた東京日本橋白木屋デパートの火災がきっかけである。それまでは着物の下には何もつけていなかったもので、和装の女性が裾の乱れを気にして逃げるのが遅れて、たくさん犠牲者を出した。これを教訓として、着物姿でもズロースとよばれる洋装の下着を身につけるようになった。(青木英夫 1987) そのような過程を経て、ようやく日本では下着を着用し始めたのである。これ以降、下着は洋装、見かけは和装という矛盾した格好をすることになる。

ヨーロッパの下着の起源はあまり古くはない。16世紀になって、上流階級の一部で着用される

ようになった。乗馬を楽しむ習慣の流行により、落馬した時に裾が乱れても男性の視線を感じなくていいようにと着用し始められた。(北山晴一 1999) このような点からみると、日本もヨーロッパも男性の視線を気にして、羞恥心を覚えて下着を着るようになったという共通点がある。しかし、下着は隠すために誕生したのだが、現在もそうであるように装飾が施されたり、おしゃれかつエロスを感じさせるデザインへと変わっていった。また、ヨーロッパでは下着を着たヴィーナスを広告に起用するなど、下着＝羨望の対象(ヨーロッパではヴィーナスなど神は羨望の対象であった。)となっていた。(図3参照) 建前としては他人に見せるものではないはずの下着を、実際には故意に視線を引くための小道具として流用していったのである。近年日本の若者の間で、見せる下着がブームになったりもしたが、下着が誕生した当時から、下着という存在は「隠す」役割の裏に「見せる」役割を持っていたのではないか。普段は見せない下着が見えたときに、羞恥という感覚が生まれるが、同じくエロティシズムも生まれて、女性の性的魅力が引き立ったのである。現在でも下着においても寛容なヨーロッパはキャミソールなどで外を歩くことも普通に行われているが、日本では破廉恥とさえ思われることもある(前述したように、見せる下着のブーム到来によって、日本もヨーロッパ化しているが)。



図3(『下着の誕生』戸矢理衣奈 2000 p.167)

ヨーロッパの衣装は、露出の多いものであり、日本の衣装は露出度の低いものである。日本は仏教の教えに由来して、露出の多い格好をすることを好まない。ヨーロッパでは、古代ギリシャの多神教の神に由来して、裸は賞賛に値する芸術性に富んだものとして考えられ、露出の多いスタイルになった。

ヨーロッパの衣装は体のラインを強調する傾向が強く、立体的に見えやすい。日本の衣装は、体のラインを明らかにしたくはない平面的なものである。しかしながら、両者はウエストに巻物をするという共通点がある。ヨーロッパのコルセットは、ウエストマークをするという役割を果たし、日本の帯は着物を留めるという役割を果たしている。これら二つは現在では異なる機能を果たしているが、両者の起源は、呪術的にウエスト付近の内臓を守るところにあると考えられている。また下着においても、最初は男性の視線を気にして着用し始めるが、次第に見せるための装飾がほどこされていくといった、当初の下着の目的とは違う用途に用いられていく経緯も共通している。

日本とヨーロッパの衣装は、露出度の高低、裸に関する考え方、体のラインの見せ方などが異なっている。外見上では対極にあるといってよい。しかしながら、それぞれ衣装の成り立ちを考えると、両者とも神や呪術の存在によって現在の格好になったのだといえよう。

## おわりに

私はこの論文で、女性の民族衣装を題材として、国や民族と民族衣装の関係について論じてきた。衣装における肌の露出度という点では特に対極にあると考えられる裸族とイスラム教徒は、ともに宗教や神を信仰する姿勢が強く、その影響で衣服が制限されているという共通点が見いだされた。実際にその格好で生活していると行動が制約されたり不便なことが多いが、まるで神の教えに背くぐらいなら今の格好のままでもよい、とでも言うように、神を畏れ崇拝している。衣服の不便ならまだしも、苦痛を伴う過剰なボディペインティングや人体改造、中近東やアフリカ諸国で現在も行われ問題となっている割礼など、神の教えに従うがあまり身体の不便も伴ってくることもある。先進国では理解しがたい現象の上、人権問題が昔よりも盛んに叫ばれている今日、女性を解放するという視点に立つと、裸族やイスラム教徒の姿は批判されるかもしれない。実際に昔に比べて緩和されているかもしれないが、原始宗教やイスラム教が滅びてもしない限り、裸族やイスラム教徒が我々

のようなファッションになることは難しいのではないかと考える。それほど衣服と宗教、神が密接に結びついているのだ。しかし、厳しい教義の下でもチャドルの下を派手にしたり、アクセサリーを呪術のお守りとして使うなど、我々のような美意識も確かに存在する。

ヨーロッパと日本においても、露出をする・しないには宗教が関係していると思われる。昔から裸を賞賛する古代ギリシャの神を崇拝していたヨーロッパでは、現在でも大胆な格好をしている人も多い。しかし、日本では仏教の教えによって露出を好まず、そのような格好をしていると、特に高齢者などには奇異の目で見られてしまう。慎ましやかな着物などを着て、豊かな肉体を隠し、裾からちらりと見える足などに男性は魅力を感じて、いわゆる「チラリズム」が好きな民族である。日本では男性が女性よりも権力的にも上というような社会構造だった。着物を着た女性が歩いていて裾が乱れたりすると、それだけで羞恥をおぼえ、必死に裾を直していた。男性の視線を気にしてのことだが、このような日本女性の慎ましやかで、謙虚な態度も男性からみた女性の性的魅力を引き立てた原因と考える。

このようにヨーロッパと日本も外見上は違いますが、宗教観に従って今日の服装が形成されているとって過言でない。また、両者には下着を着用し始めた起源が男性からみた女性の視線を気にする故という共通点もあった。

衣装は生命体のようなものと先で述べたが、ほとんどが文明の高度化の過程で形態を変えていくのに対して、先祖の教えを守り強固に昔ながらのスタイルを貫き通す民族もいる。この先私たちが想像できないような高度な文明の未来が訪れても、服を着用しない未開民族が生き続け、神や呪術を重んじる姿勢も生き続けるだろう。

また、本稿でとりあげた国での衣装には、女性の男性に対しての姿勢が大いに反映されていたし、宗教とその国における女性の立場も密接な関係があった。

卒業研究を通じて、宗教や神の影響によって服装が形成されるなど、神の存在は偉大だということに改めて感じさせられた。また、女性は男性の視線というものを敏感にキャッチし、自らを飾り

立てたりするもので、男女平等の世の中とはいえ、依然男性の要望に沿うような格好をする傾向がある。生命体のような衣服は、これから男女の関係性や世相などを反映してどのような変化を遂げるのか、興味深い。

## 文献

- 戸矢理衣奈 『下着の誕生』 講談社選書メチエ 2000
- 駒尺喜美 『女を装う』 勁草書房 1985
- 青木英夫 『服飾史』 酒井書店・育英堂 1987
- 青木英夫 『下着の流行史』 雄山閣出版 1991
- 元田與市 『日本のエロティシズムの眺望～視覚と触覚の誘惑』 鳥影社 2006
- 国立民族学博物館 『装うインド インドサリーの世界』 2005
- 深作光貞 『「衣」の文化人類学』 PHP 研究社 1983
- 21世紀研究会 『民族の世界地図』 文春新書 2000
- 小川安朗 『民族服飾の生態』 東京書籍 1979
- A・ブーディバ 『イスラム社会の性と風俗』 桃源社 1980
- 北山晴一 『衣服は肉体になにを与えたか』 朝日新聞社 1999
- ハンス・ペーター・デュル 『裸体とはじらいの文化史』 法政大学出版局 1990
- T. ヴェブレン 『有閑階級の理論』 岩波書店 1961
- ジョアン・フィンケルシュタイン 『ファッションの文化社会学』 せりか書房 1980
- 武田尚子 『下着を変えた女』 平凡社 1997
- B・ルドフスキー 『キモノ・マインド』 鹿島出版会 1983
- 『Patterns of Modern Materialism, New York』 Mukerji, Chandra 1983 (ジョアン・フィンケルシュタイン 「ファッションの文化社会学」 せりか書房 1998 所収)
- 『性・イスラム法および生殖に関わる権利』 Pilipina Legal Resources Center, Inc 2001 (A・ブーディバ 「イスラム社会の性と風俗」 桃源社 1980 所収)
- 『アサヒグラフ別冊 美術特集西洋編 21』 朝日



新聞社 1992 (元田與市『日本のエロティシズム  
の眺望 - 視覚と触覚の誘惑』鳥影社 2006 所収)  
『H.Ellis, 1900 ,S.18;J.Guttzeit,1910,S.30.』(ハンス・  
ペーター・デュル『裸体とはじらいの文化史』法  
政大学出版局 1990 所収)